

## 最終講義

# フランスの解体？ もうひとつの国民国家論

西 川 長 夫

### はじめに

今日は年末の忙しい時に、皆様、多数お集まりいただきありがとうございます。水曜日の3時限、本来この授業は「ヨーロッパ研究」なのですが、今日はこの授業の受講生の他に、ゼミの卒業生、学内や学外の方々も大勢来ていただき、なかには北海道や東京など遠方から駆けつけて下さった方もあって感激しています。今、安藤先生から御紹介がありましたように、私が文学部の専任講師として採用されたのはたしか1966年で、それから数えると33,4年。国際関係学部では初めから設置委員としてかかわってきましたから、学部の年齢と同じく12年になるのではないかと思います。今日までよく続いたなと思います。今から思い返すとわがまま勝手なことをやって、いろいろ御迷惑をおかけしました。今日、このような形で最終講義ができるのも皆様のおかげであると思い、感謝の気持ちで一杯です。

事務の方からいただいた案内に「最終講義」という文字を見た時は、とうとうその時が来たのかと、少し恐ろしい気がしました。どうしたわけか咄嗟に連想したのは、ナチスのユダヤ人虐殺にかかわる「最終解決」という言葉でした。それからドーデーの「最後の授業」、深沢七郎の「檀山節考」なども思い出しました。考えてみれば、私は学生時代から、つまりこの半世紀ほど、いつも恩師にあたる方々の「最終講義」を聞く側にいて、「最終講義」をする人の立場になって考えたことはなかった。今日が最初のそしておそらく最後の経験だろうと思います。

定年を「解放」と考えるのか「追放」と考えるのか、人により国によって違うように思います。フランス人の多くにとっては定年は紛れもない解放です。アメリカのように性差別と共に年齢差別に対する批判が厳しいところでは、定年という制度自体、崩れかけていると聞いています。私自身は「最終講義」を人類学で言う「通過儀礼」の一種として受け入れることにしました。誕生や成年式や結婚などと違って、「最終講義」は死への通過儀礼、つまり生きている間に行われる葬式のようなものだと思います。私は敗戦時の体験や重い病気をしたことなども

あって、若い頃から自分の今は余生であるという感覚があったのですが、これからは社会的に公認された、第二の本当の余生が始まるのだと思います。今までより少しは自由人として振舞えるのはうれしいことで（肉体的にはだんだん不自由人になっていきますが）、これから真の人生が始まることを期待しています。

## 1. フランスの解体

今日はひょっとしたら、私の一世一代の大演説を期待して来られた方があるかもしれません。残念ながら、そうはならないことを初めにお断りしておきたいと思います。国際関係学部では担当している授業の最後の時間を最終講義にあてることになっています。今年度は学部だけに限ると、通年のゼミは別として、前期は「比較文化論」と「国際文化理解特講」（「アジアの多文化社会と国民国家」）の2科目持ちました。後期は「ヨーロッパ研究」のみです。今日はその授業の最終回です。したがって今日の「最終講義」は、「ヨーロッパ研究」のまとめという枠組みの中で話をさせていただきます。

「フランスの解体？ もうひとつの国民国家論」という演題に当惑された方があってはいかと思います。これは実はこの10月に人文書院から出してもらった私の最近の本のタイトルです。事務室で大分前に演題をたずねられて、とっさに考えがまとまらず、この本のタイトルを言ってしまった次第です。12年前、設立された国際関係学部から文学部から移籍してきた時、一つ決心したことがあります。文学部で慣れ親しんできた、「文学」と「フランス」という自分にとっては得意な分野については、国際関係学部ではなるべくしゃべらないようにしよう、ということです。それは国際関係学という、自分にとっては新しい分野に入っていくための方策であったわけですが、ずっと片手を縛ってボクシングをしているようなもどかしさがありました。その結果たどり着いたのが「世界システム論」であり、「国民国家論」でした。

だが国際関係学部で最後の授業をする年になって、その戒めの一つを破ってフランス論を書き、書物にして「ヨーロッパ研究」のテキストとしました。書物のタイトルは初め「フランス論」を考えていたのですが、「フランスの解体？」になりました。考えてみると、「フランス」あるいは「フランス論」から「フランスの解体」に行き着くまでの間に、私自身の国際関係学部における12年があったように思います。この12年間、国際関係学部でなるべくフランスのことをしゃべらないようにしながら、そして実際フランスについてあまりしゃべる相手もない孤独のなかで、フランスの解体に専念してきたということになるのでしょうか。

では「フランスの解体」とは何か。最近、「出版ニュース」でこの本の紹介が出ています。その冒頭に解答が書かれていました。「フランスの解体とは何か。それはまず著者の半世紀にわたるフランスに学び、フランスを自己の内に取り入れようという作業と、それを自分

なりに理解し、消化し、解体する作業 との一体化としてある。割合上手に書いてあるな、しかしちょっと青臭いなと思ったんですが、実はこの本のあとがきに書いている自分の文章の引用でありました。初めに「フランスの解体」の3つの側面についてお話ししたいと思います。

第一は、私自身の中に長年住み着いている特権的なフランス像の解体、相対化です。それを理解していただくためには、私の学生時代、1950年代から60年代にかけて、フランスがいかに輝かしい存在であったかを言わなければならないと思います。フランスはフランス革命とレジスタンスの神話によって、サルトル、カミュ、バルザック、スタンダール、フロベール、ボードレール、プルースト、ジッドなど文学や哲学者の名前によって、芸術、音楽によって、映画によって、他とはちがう特別な国でした。それに私が学んだ京大のフランス文学科には伊吹武彦、生島遼一、桑原武夫のような魅力的な教授たちがいました。その頃、フランス文学をやることは、まず、就職はできないし、貧乏を覚悟しなければならないということの意味でしたが、そういうこと自体が当時のいささか反抗的な若者をひきつけるというところがありました。

第二は、第一と重なりますが、表象、イデオロギーとしてのフランス、つまりフランス・イデオロギーの解体です。この側面は、人文書院の編集者である落合祥堯さんが、この本の帯に大変上手に書いて下さいました。「フランス・イデオロギーとは何か。人権 や 自由・平等・友愛 はフランス共和政の国家イデオロギーであった。フランス革命以降に形成された国民国家の諸装置や文明・文化概念は、68年の5月革命や89年以降のヨーロッパ統合、グローバル化の中でどのような葛藤を経験し変容を迫られているのか。ポスト国民国家の時代に向けた フランス の大胆な脱構築、衝撃のフランス論」。

「ドイツ・イデオロギー」や「日本イデオロギー」が厳しい批判の対象になっているのに対して「フランス・イデオロギー」という言葉はあまり言われなかった。「フランス・イデオロギー」はむしろ称賛され、長い間批判を免れてきました。それにはフランス革命やレジスタンスの神話が大きな力を持ってきたし、実際にさまざまな市民革命や第三世界の独立運動の中で、フランス革命の理念や人権概念が強力なモデルとして想起されたことは、忘れてはならないと思います。

しかしながら、レジスタンスの神話は半世紀を経て、ヴィシー政権時代のフランスのナチス協力がどういうものであったか、実態が暴かれる一方で、ナチズムにつながるような、あるいはナチズムを先導するようなものが、思想的にも政治的にもフランスにはあったのだということもだんだん明らかになってきて、ほぼ半世紀でレジスタンスの神話は崩壊したのではないかと思います。

人権についてはどうでしょう。国際関係学部のエントランス・ホールには「世界人権宣言」が高らかに掲げられています。エチエンヌ・バリバルはフランス・イデオロギーの本質を

「人権の国」の文化による人類の教化を普遍的な任務と考える」ところに見出しています。それは「文明化の使命」という植民地主義の理念に通じるものであると思います。この本に収めた文章で、そのことをかなり強調しておきました。フランス革命期に人権宣言を起草した人たち、それにかかわった人たちは、フランス革命を契機に起こったハイチ革命、ハイチにおける黒人奴隷の解放と世界最初の黒人による共和国樹立にどう対処したか。第三共和政の中心的な政治家であったジュール・フェリーはフランスの植民地主義を批判された時、議会でどのように答えたか。そういうことを書いておきました。その他さまざまな事例から、人権思想は植民地主義に必ずしも抵触しないどころか、植民地主義の支えにさえなりうる、ということがわかります。そのことはたとえば、アメリカの独立宣言やフランスの人権宣言を引用して、欧米や日本の植民地主義を批判した、1945年のベトナム民主共和国独立宣言が指摘する通りです。その全文を、「多文化主義とアジア」と題した章の注に入れておきました。

第三に、フランスの解体は、E C - E Uに至るヨーロッパ統合の流れの中で強く印象づけられます。この本にはE Uにかんする論考が4編収められていますが、ヨーロッパ統合の進行過程は即フランスの再編 解体の過程であると言っていいと思います。加盟国の域内の国境管理の廃止をめざしたシェンゲン協定以来 最初は85年ですが、それ以後、次第に参加国が増えています 域内の国境の壁が低くなり、ほとんど目に見えないものになっていることは、ヨーロッパを旅行された方は誰も実感したと思います。域内の移動にパスポートは不要です。ヒト、モノ、資本の移動が自由になったところで既成の国境概念を維持することは困難です。主権の概念も国籍の概念も変化せざるをえません。

国民国家としてのフランスは、後で少しくわしく述べたいと思いますが、共和政に忠実であるという点では、非常に保守的な国です。そのフランスも、域内の他の諸国と同様、予想をはるかに越える速さで変容していきます。思いがけないことが次々と起こっています。たとえば世界の非難を浴びたムルロア環礁での核実験のすぐ後で、シラク大統領はフランスの徴兵制の廃止を宣言しています。私たちは戦後、平和憲法のおかげで、軍隊に関する感覚が、ある意味で過敏であり、ある意味で鈍くなっていますが、軍隊は制度的にも、シンボルとしても、国民国家の中心に位置する装置です。その証拠に各国の建国記念日に何が祝われるか。軍事パレードが行われます。フランスの革命記念日も、中国の建国記念日も同じことです。われわれはそれに慣れていて不思議に思わない。フランスでは大革命からの歴史があって、軍隊は共和国の中心であり、国民皆兵は共和政的デモクラシーの基本理念です。その制度が変えられる。しかも徴兵制が廃止される一方で、E U共同の軍隊の創設の試みがあります。これは大きな変化だだと思います。軍事に関して最近のニュースを付け加えますと、2週間ほど前、マジノライン、フランスがドイツとの国境に沿って延々と築いた大要塞地帯が売りに出されたという報道がありました。そういう要塞を置く必要がもうない。相手のドイツの業者がその一部を買うという

記事がありました。マジノ線が観光資源になり、それもドイツ資本が買い取るなどということは、古いフランスのイメージを保持している人にとってはとうてい信じられないことでしょう。

最近話題になっている通貨統合も、最初それが実現すると思った人はあまりなかったと思います。経済面は別として、フランス・フランは国旗や国歌と同じようにフランスの重要なシンボルです。それがユーロに変わる。それに抵抗して、一時フランスの古い貨幣単位のエキュが主張された時代もありましたが、フランからユーロに変わるの象徴的な大事件です。マストリヒト条約、ヨーロッパ連合条約の賛否をめぐる国民投票は、フランス国民はフランス人であることを優先するか、あるいはヨーロッパ人であることを優先するかという、いわゆるナショナル・アイデンティティのあり方をめぐって行われ、ごく僅少差で後者を選んだ。フランス人であるよりもヨーロッパ人であることが優位を占める結果になりました。

## 2. フランス共和政と移民問題

こういうふうにして、ヨーロッパ統合の流れは、フランスの解体を含みながら展開しています。今後、抵抗も強いし、さまざまな紆余曲折があると思いますが、この流れの方向は変わらないと思います。しかしその過程はかなり複雑です。複雑な状況の例として「フランス共和国モデル」と移民の問題を取り上げておきましょう。フランス共和政はフランス・イデオロギーの制度的な根源ですが、ヨーロッパ統合の中で主導的な役割を果たし、同時に統合の阻害要因にもなっています。ではフランス共和政とは何か。国民国家の典型的なモデルとなるものですが、テキスト184頁以下に要約を記しておきました。

「統合の 共和国モデル の特色として、次の3点を挙げるができると思います。第一は、それがフランス革命以来のものであり、現在まで続いているということです。その際立った特徴として 自由・平等・友愛 のスローガン（これは 人権 概念につながるものでしょう）と 単一不可分の共和国 という愛国心につながる中央集権的な強力な国民統合の形態、さらには非宗教化 laïcisation（これは革命期には非キリスト教化 déchristianisation と呼ばれていました）という3つの柱をあげることができます。歴史的に言うと、この3つの特徴は、普仏戦争の敗北とパリ・コミュンの危機の後、第三共和政による国民国家再編の動きの中で一層強化されました（第三共和政期におけるフランス革命の制度化）。

第二は、公教育と国語の重視。これは共和国的国民化の特徴と言ってよいでしょう。この場合の教育 éducation は広い意味での教育で、社会化 socialisation とほぼ同じ意味です。つまり共和国の市民（国民）形成のためのルールとモラルを身につけることであります（...）。このような教育は原則として国によって行われ（私学の弱体）、したがって初等・中等教育の教員は

共和国のイデオロギーの中心的な支持者です。またこの教育の中で最も重視されるのが国語教育です。」

国民統合、国民文化の中心をなすものとしての国語。広い意味での国語で、文学、哲学、歴史も含めた国語教育に統合の中心を置いているのがフランス共和政の特徴である、と言ってよいと思います。フランスの大統領になる人はナポレオンもそうですが、いずれも例外なしに広い意味での文学者であります。国語政策を歴史的にたどっていくと、かなり複雑ですが、基本的にはフランス語の使用を義務づける。EUへの加盟を決めたの憲法改正で、わざわざ「共和国の言語はフランス語である」という驚くべき一項を入れたりしています。他方では、地域言語の学習、使用を認めて大学入学資格試験の試験科目にはコルシカ語、ブルトン語、バスク語、カタロニア語、ゴール語、オック語、タヒチ語などを受験科目として認めるということもあります。国語をめぐるせめぎあいがフランス革命後、続いているわけです。そういう矛盾をどう考えたらいいか。フランス共和制は国家レベルにおいては依然として同化志向が支配的で、地方自治主義や多文化主義は国家レベルでは原則としてありえません。その点かなりはっきりしています。ありうるとしたら例外的な処置です。あるいは私的な領域については全く自由です。われわれが憧れた、フランス的自由という場合の私的な領域における自由と、共和政の厳しい単一国家、中央集権を維持するやり方との間にはギャップがありますが、この二つは表裏一体をなしているということです。

共和政の第三のの特色は、この200年間、原則的な変更はほとんどなかったことでしょう。「統合の 共和主義モデル の時代的変化への対応は、原則の変更ではなく、例外処置によって行われる。ジャコバンの共和主義の伝統は、ナショナル・アイデンティティの維持にとって最も基本的であると思われる一言語一文化の原則にあくまで固執し、多文化主義や相違の権利は、例外や個人の領域に追放される」(P.187)。

このような統合モデルは血統主義のドイツとは一見、対照的ですが、生地主義をとる分、移民に対する同化主義が強くなるというパラドクスが認められます。アングロサクソン系の多文化主義とも異なるわけです。EUの中では、いくつかの異なる統合モデルが相競っているのが現実だろうと思います。しかし今や「フランス共和国モデル」は、例外処置や公的領域と私的領域の区別では対処しきれない状況に直面しています。

強固な共和政をゆるがす流れを、これも三つほど挙げますと、第一点は、大革命とそれ以後のジャコバンの共和主義によって抑圧されてきたジロンド派的な地方分権主義があります。フランス革命の時から、その二つの勢力は相争いながら、結局はジャコバンの中央集権が支配してきたわけですが、中央集権の力が弱まると、潜在的な地方分権の勢いが強くなり、表面に現れてくる。80年代に入ると、地方分権は左翼政権によって法的にも強化されました。

第二点は、ECからEUに至るヨーロッパ統合の流れです。統合の中で中央集権的なパリを

中心とした中央と地方の関係は、EUによるヨーロッパ全体の統合の中で、中核、周辺の配置が変わり、それに応じた変化が生じてきています。その結果としても、フランス共和政的な中央集権の維持が次第に困難になってくる。

第三点は、移民の問題です。19世紀後半から移民は増加しました。移民に関してはカナダ、オーストラリア、アメリカともある程度共通した現象が認められます。第一に、移民は初期には、その国の人口不足による、主として経済的な理由から進められる。経済的な拡大期には、多くの移民が求められる。経済的縮小期、不況の時代には移民の停止や送還が行われる。第二に、初期の移民はヨーロッパ系で占められていた。フランスでも、スペイン、イタリア、ポルトガルなどヨーロッパ内からの出稼ぎ的な移民が多く、それがだんだん非ヨーロッパ系が多数を占めるようになって、そのことがさまざまな問題を引き起こすようになります。第三に、移民の問題は、西欧列強による植民地支配の事後処理、後遺症の要素を多分に含んでいます。これについてはオーストラリア、カナダの多文化主義の国とヨーロッパの間には大きな差がある。多文化主義は国民国家を超えるというよりは、移民国の新たな国民統合の一形態として作り出されたものだと思います。カナダ、オーストラリアの多文化主義は植民地時代の償いの意味を持ち、旧植民地の再アジア化、再有色化という現実があって、それを受け入れようとする。ヨーロッパの拡大から始まった500年来の世界史を書き換える、西欧中心的な歴史認識がそこで転換するという動きを背景に持っています。ところが、ヨーロッパの場合は、EUを作ることによって、各国が植民地の歴史を忘却し、罪の意識から解放されて、ヨーロッパのヨーロッパ化を行おうとしている、という印象が強い。

移民問題にかんするシンポジウムに出席していつも不満に思うのは、移民問題は常に受け入れ国の側、旧宗主国の側から論じられている、ということです。移民政策として議論されている。移民問題の専門家はどうしてもそういう立場から議論する。移民自身、移民を送り出す側、送り出す側と受け入れる側の双方の関係を世界的総合的な関係から議論することが少ないのです。ほとんどないんじゃないかと思います。シンポジウムでヨーロッパから来た人たちの話を聞くと、国内問題としての移民問題という難問をどのように解決しているか、旧宗主国の自慢話になるか、愚痴話になるか、といった傾向があって、がっかりすることが多いのです。

### 3. やり直されるフランス革命

EU全体をどう考えたらよいのでしょうか。この本には「ナショナルリティの概念を越えて」というタイトルの文章があります。1996年、台湾で行われたシンポジウムで、フランス語で報告したものです。これは本学部に客員教授として在籍されたWeipenn-Chang先生が中心になって組織した国際シンポジウムで、台湾語、中国語、ドイツ語、英語、フランス語が飛び交う興

味深い集りでした。この報告に「Union européenne ou la Révolution refaite?」という副題をつけました。la Révolution refaiteというのがうまく訳せないのですが、仮に「欧州連合、あるいはやり直されるフランス革命?」としておきます。どうして「やり直されるフランス革命」かというと、私は長年フランス革命に熱中していて、退職後の仕事の一つとしてミシュレの『フランス革命史』の全訳を考えているほどなのです。しかしながらフランス革命にはさまざまな可能性があったが、結局、それが典型的な国民国家を作りあげることに帰着したことは認めざるをえません。統合のための制度、装置あるいはイデオロギーの観点から眺めると、現在のヨーロッパ統合は200年前のフランス革命の国民統合と類似点が意外に多い。議会を作り、憲法を作り、軍隊を作り、国旗や国歌を作る…。そういう類似点を強調すると、EUは、より大きな枠組みの、より拡大された国民国家にほかならない、ということになります。こういう議論の立て方で二つの統合の類似点とともに差異を明らかにして、ナショナリティ概念を越えるヨーロッパ統合の新鮮さに照明を当てたいと思いました。

「やり直される」という言葉には、さまざまな意味が込められています。ヨーロッパ連合はフランス革命に匹敵する歴史的な大事件であるが、それを遂行する政治的想像力はフランス革命後の国民国家時代の想像力をなかなか越えることができないなあ、という嘆きというか、感慨も込めています。新しい政治的想像力をなかなか生み出せない。何かをやると、それぞれの国家の、フランス革命以来の統合と同じような発想に戻ってしまう。しかしともかくもそれは、国民国家のあらゆる弊害が出尽したかに思われる時点における「やり直し」です。ECからEUに至るヨーロッパ統合の動きは第二次大戦で破壊され、荒廃したヨーロッパの自己救済の試みでもあったと言ってもいいでしょう。そこには第二次大戦を導いたものに対する、何が大战を引き起こしたかのという反省的な問いと、戦後の荒廃からいかに立ち直るかという方法の模索がありました。

第一次、第二次大戦を通して、ようやく明らかになった国民国家のさまざまな弊害が、フランス革命から始められたヨーロッパの（そして世界の）国民国家システムの根本的な変革を必要としているのだと思います。つまりEUは大量殺戮、大量破壊を招いた二つの大戦の反省から出発している。そのことは忘れられがちですが、忘れてはならないことだと思います。思想的にたどれば、欧州連合の思想的な系譜は18世紀の啓蒙思想、サン・ピエール師の「永久平和論」（1713年）からはゲーテンホーフ＝カレルギーの「汎ヨーロッパ連盟」（1924年）に至るまでさまざまな思想家をあげることができます。しかし初めから明確な思想とかプラン、見取り図があって行われたのではなく、ヨーロッパの諸国のそれぞれの時点での国家のエゴイズムのぶつかり合いが、しかしある方向性がある、次第に国家を越えるような形態を作り上げていく過程だろうと思います。

私はこれまでいろんな形で欧米批判を続けてきました。実際、これまで述べてきたようにフ

フランスの共和政，形成途上のEUについても批判すべき点が多い。だがそれにもかかわらず，こうした批判を続けているうちに，次第に共和政の偉大さを実感し，またEUはすばらしいなと思うことがある，ということも最後に告白しておきます。200年の試行錯誤の末に練りあげられたフランス共和政は，その土台となる前提を疑わなければ，やはり見事な政治的構築物です。だがいま問われているのはそれを成立させている前提の正当性です。EUの場合も，さまざまな立場と国家的なエゴイズムがぶつかりあい，ある解決を求めて方向性が出てくる。そこには「ヨーロッパ的理性」とでも呼びたいものさえ感じることがあります。なぜそう感じるようになったのか。おそらくその理由の一つは日本の現実と比べるからだと思います。日本も戦後の荒廃の中から出発しました。状況は同じだと思います。最近，日本国憲法のことをよく考えますが，前文と第9条は戦争に対する反省の一つの形だろうと思います。軍隊は国民国家の中核的な装置であり，20世紀の歴史を振り返ると明らかですが，国民国家は結局，戦争機械であった。その中核にある装置を否定しようとする戦争放棄は，国家を否定し，国家をのり越えるための驚嘆すべき提案だったと思います。ところが戦後の歴史の中で，右も左も，政治家も知識人も，戦争放棄をそのようには考えなかった。ひたすら国家の再興と強化を考えてきたのです。そして今年8月には「国歌・国旗法案」のようなものが，大した抵抗もなく，敗戦記念日の直前に議会を通過しました。まさに旧日本帝国の復活です。

同じ戦後の廃墟の中からヨーロッパが作りだしてきたものと，われわれ日本人が作りだしたものを比較対照して考えると，日本人が戦後歩んできた道は何であったのか，暗澹たる思いにとらわれます。EUを理想化するつもりはありません。EUは歴史の一過程であって，単純に成功とか失敗といった評価を下せるものではないと思います。ただ言いたいことは，そこでは200年来，我々の思想や身体を支配してきた国民国家，国民国家群が，苦悶の末に姿を変えようとしている。蝶になるのが蛾になるのか，あるいはゴジラのような怪獣になるのかは分かりませんが，この歴史的な脱皮と変態のドラマを見ない法はない。そこから何を読み取るかによって，われわれの知性と想像力が試されているだけでなく，われわれの生命と運命がそこにかかっているのではないかと思います。

## おわりに

どうやら予定の時間をすぎてしまいました。この後，お話ししたかったのは，「翻訳」の問題と「移民」の問題です。この本では「フランス共和政」とかかわって言語の問題を重視していますが，もうひとつ「現代における 翻訳 の問題」と題する文章を入れておきました。そこに，これまでの国際関係学が言語や翻訳の問題を軽視してあまり触れようとしなかったことに対する私なりの批判を読みとっていただければ幸いです。「現代における 翻訳 の問題」は昨

年の6月にパリで開かれた「翻訳」にかんする国際シンポジウムでの報告に少し手を加えたものですが、そのなかに「私の考えでは、近代の国民国家は、広い意味での 翻訳 の一形態であり、 翻訳の諸結果 の一つです」(p.231)という一節があります。私の考えでは「翻訳」は国際関係学のキータームの一つであるべきものです。世界システムや国家間システムにおける「翻訳」の役割、あるいは「翻訳」という観点から国際関係、人間関係を見たら何が見えてくるかということが、私がいま考えているテーマの一つです。「移民」も広義の「翻訳」の一形態とみなすことができないでしょうか。「移民」についてはすでに触れましたが、「移民」の側から、あるいは移民を送り出す側から世界を見たら何が見えてくるか。これまでの社会科学は定住社会を前提としてきたと思います。主権も国籍も文化も、あらゆる概念が、定住を前提としてし成り立っている。だが世界は国際移動の時代に入っている。移住社会という前提から見たら何が見えてくるか。移住社会において主権や国籍や文化はどのように定義されるのでしょうか。

「最終講義」を準備しながら胸中に去来していた一つの言葉がありました。それは今期の授業の始めのころに紹介したジャン・グルニエ(アルベール・カミュの先生です)の「人は生地を選ぶことはできないが、死ぬべき土地は自分で選ぶべきだ」という言葉です。これは92年の『国境の越え方』の中に引用したのですが、教室でこの言葉について感想を書いてもらったことがあります。10年前だと、この言葉はかなり反感を誘うところがありました。移動や移住はエリートの特権ではないか、といった反応がありました。しかし現実はだんだんそうでない、貧しい、あるいは普通の人たちの移住、移動が問題になってきています。今年の授業ではこの言葉はもう少し自然に受け入れられたような気がします。10年後、20年後、その時は私はもういないと思いますが、だんだん移住社会になっていった時、その言葉がどういうふうにして受け入れられるか。皆さんがそれをどう考えるか、ちょっと楽しみでもあります。

言い残したことは山のようにありますが、これで終わらなければなりません。今日は最終講義なので、言い残したことを次にするわけにはいきませんが、言い残したことがたくさんあるということは、これから私が余生を生きるための力になるのではないかと思います。振り返ってみますと、私はこれまでかなりたくさんものを書いてきましたが、書きながら教室の皆さんのことを絶えず思い出していました。書くという孤独な作業を支えてくれたのは教室における皆さんとの対話であったと思います。授業は私にとって楽しい時間でした。心から感謝しています。どうもありがとうございました。